ロリ幽霊が
霊能力者を
キ〇タマ責めで返り討ち！

玉子王子　著

１章　寺生まれでロリコンの田中さんにロリ幽霊が迫る

ネットでまことしやかに囁かれる噂。
それは寺生まれの人間には霊感があるというものだ。
田中は、その噂が嫌いだった。
寺に生まれただけで霊感など身に付くわけがない。
実際、彼は別に何の力もなかった。
だが、寺生まれというだけで霊能力者扱いでお払いなど頼まれたりする。
普段なら迷惑なだけだが……
「お兄ちゃん、がんばって！」

「でへへ、がんばるよ」

大学生ぐらいの男女と、〇学生の女の子が一人たっている。

とある古いマンション。

と言っても、まだ修理すれば使える。

使えるはずだが、今店子がいない。

馬鹿馬鹿しい話だが、お化けが出るという噂があるのだ。

というか、田中には正気ではないと思えた。

寺生まれらしいから、除霊して欲しいと大学の友人に頼まれた。

水田。家が水産業をやっているというそのまんまの背景の女。

美人で有名で、ミスうさぎ大に何度も選ばれているという。

――クッソどうでもいいわ。

心底そう思った。

なぜなら、田中は根っからのロリコンだからだ。

彼女の話を聞いても、そもそも霊能力などないのだからできる話ではない。

霊などいるわけもないし。

そう思ったが、彼女が喫茶店での打ち合わせに偶然連れてきていた妹を見て考えが変わった。

「マリちゃんって言うんだ、でっへっへ、マリちゃんのためなら、お兄ちゃんがんばっちゃおうかな？」

そんな**通報されそうなこと**を平然と言ってのける男だった。

水田が妹を連れてきていたのは、田中がそういう人間らしいことが薄々友人たちに知られているためだった。水田が友人ということではなく、アドバイスを聞いたということである。

しかしこれほど効果覿面とは思ってもいなかった。

引きつつも、表面的にはいい顔をして、事情を説明し、除霊を引き受けさせた。

そして今、見送りにも妹を同行させている。

親が個人的に持っている資産の中で、幽霊が出るという意味のわからない理由で塩漬けのマンションは大きなマイナスなのだ。

上手くお化けがいなくなれば、家賃が五万でも一部屋一年で六十万、三十部屋のマンションなのでその三十倍の収入になる。

維持費が要るのでまあ、全部収入ではないが、今は維持費だけでマイナスなのだ。

それが解決すれば親に小遣いでも貰えるだろうと水田は考えていた。

田中が確実にどうにかするとは思っていない。

寺生まれだから、と期待するのは馬鹿げていると思っていた。

が、もしかしたら、という思いはある。

田中が入っていくのを見送り、踵を返す美人姉妹。

「あの人大丈夫かな？」

「それは更なるお化けの噂のネタになるかも、ってこと？」

「お姉ちゃん酷いよ」

「パパママの方が酷いよ、水田真理とか普通つける？」

「あ、全世界の水田真理さんに土下座するしかないね」
「まあ、苗字が糞田でなくてよかったわ」
「そうねー、糞田真理じゃ悲惨だもんねー、って、糞田なんて苗字あるわけないでしょうが」
「っていうかどんな名前だろうが、苗字が糞田じゃ悲惨だというね」
お化けが本当に出る、と確信はしていない二人。
しかし自分で泊まろうとは考えないところは、多少の不安はある。
それを他人に押し付ける後ろめたさをいい加減な会話でごまかしながら去っていく。
一方、田中。
「へへへ、これを機会に真理ちゃんとお近づきになれたらいいんだけどな」
そんな可能性は極端にゼロに近いが、妄想するだけなら合法だろう。
「とりあえず、中見廻るか。マスターキーは借りたし」
いいつつ、スマホをいじる。
今さら情報を集めていた。
灰汁椋ハイツ、というどうしようもない名前のマンション。
名前を入れるだけで情報が出てくる。
女の子の悪霊がいて、入る人間を攻撃するという噂だ。
「何歳ぐらいなんだ、そこが重要だろうが」
どうでもいい所に着目する寺生まれの田中。
年齢はかなり若いらしい、ということだが、霊なので細かいことはわからない。
「これは美味しいな。見た目が若く見えても、霊だからセーフという理屈だ。相手が霊なら何してもいだろうし」
どちらが悪霊かわからない発想の田中。
しかし、口では何だかんだいっても霊の存在など信じていない。
プラプラマンションの中を見回り、何日か泊まっただけで金が貰え、ヨ〇ジョと親しくする可能性が手に入るラッキーな仕事としか見ていない。
後半の期待はともかく、前半はごく普通の感覚だろう。
「ていうか子供が霊になるって事は、死んでるってことだ。それは可哀想だよな」
廊下を歩きつつ、ふと背後に嫌な気配を感じる。
振り返る。
が、誰もいない。
前に向き直る。
何もいない。
「何きょろきょろしてるんだ俺は……って、何を独り言いってるんだ」
誰もいない建物というのも不気味なものだ。
歩きつつ、スマホを見る。
数日前にも、ヤンキーたちが肝試しに入ったという話だ。
三人のヤンキーたちは次の日気絶して発見された。

　その三人がどういう状態だったかを読んで、田中の股間がキュッと縮み上がる。
「な、なんだと……キ〇タマを潰されてただと？」
　今はナノテクで肉玉が潰れても一日で治る。
　だからまあ、玉を潰されるのは**地獄の苦しみ**程度で済む話だ。
　周りを見回す田中。
　霊はいないのかもしれない。
　だが、ヤンキーたちの肉玉を潰す何かはいたのではないか。
　ヤンキーたちは、「焼肉怖い」とうい意味不明のことを言うばかりで、何が起きたのか証言しないという。
「なんだよ焼肉怖いって……」
　饅頭怖いの変形だろうか。
　いや、それは意味がわからないか。
　す、す。
　そんな声が、どこからか聞こえる。
「な、なんだ？」
　周りを見る。
　先ほどから、嫌な気配を感じていた。
　だが、何もいないのだ。
　す、す。
　また、声が聞こえる。
　それは「す」ではない。
　いや「す」ではあるが、それは長い言葉の中の一部でしかない。
　耳を澄ます田中。
　突如、大音響。
「キ〇タマ潰す！」

「な、おぐうううっ！」

目の前に、白い服の女が現れていた。

半透明である。

不健康そうな白い肌、青っぽい髪。

それが、膝を田中の太股の間、ジャージの膨らんだ股間に減り込ませていた。

ゴチャ、と音が出るほど激しい膝蹴り。

持ち上がり、腰骨に押し付けられて潰れる肉玉。

膝をゴリゴリ動かしながら、絶叫する女。

「そらそらそらっ！　隙だらけなんだよ腐れキ〇タマがよっ！　ここは私の縄張りだ、勝手に入る奴はキ〇タマ潰すぞ！　おらおらっ！　ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ、膝でキ〇タマ磨り潰してるのがわかるか！？」

「あぎいいいいいっ！　や、やめてっ！」

突如の金蹴りに真っ青になり、爪先立ち。

相手は決して背が高くはない。

　むしろ〇学生ぐらいだ、先ほどあったマリと同じぐらい。

　それが、膝を余裕で大柄な田中の男の肉玉に減り込ませている。

　無理して上げているのではなく、腰の辺りでＬ字にしているのだ。

　なぜそれが可能かというと、フワフワと浮いているからだ。

　というか、透き通ってすら見えた。

　それでも、肉玉を潰しにくる膝だけははっきり感じられた。

「おらおらっ！　去勢ってわかるか？　忘れられなくしてやるよっ☆」

「やめてくれえええええええええええっ！」

　ノリは軽いが、完全に肉玉を潰す気なのは、いくら下がってもフワフワついて来て全力の磨り潰しを食らわせてくることで田中にはよく分かった。

　と、足が下がる。

　が、もちろん追撃のために下げただけだった。

　反対側の足が跳ね上がる。

　細いが肉付きのいい、田中の好きな年代特有のいい感じの足だ。

　それが今凶器と化している。

「あ、おぐっ！　キ〇タマあああああああああああああっ！」

「ぎゃはははは！　キ〇タマって！　キ〇タマ蹴られてキ〇タマって！　気に入った！　このまま睾丸潰す気だったけど、加減しよう！」

「ま、マジで？」

「三つ潰す気だったけど、二つにしてあげるよ！」

「二個しかないんだよおおおっ！」

　田中の恐怖の叫びが無人のマンションにこだまする。

体験版終わり

この後執拗な金責めがあったり

幻術をかけられてロリと風呂に入ったり、

大量のロリ幽霊にキ〇タマを蹴られまくった上に脱がされ、

短小チ〇ポを笑われるなどの展開になっております

続きは製品版で